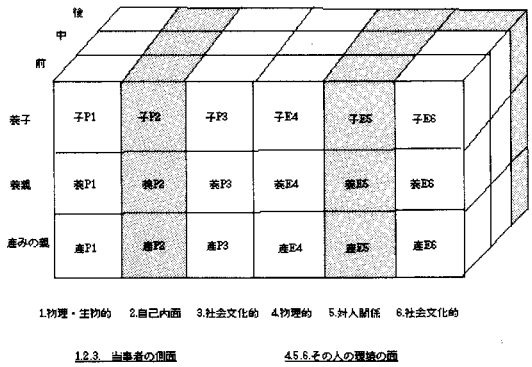

【図1】組織相関理論（Organizational-Relational Theory）：養子縁組の54変数（ブロック）とその相互関係

に、養親希望者面接30組、特別養子縁組申立済15組、試験養育期間中14組、特別養子縁組確定6組がなされた（環の会 1998）。そして、養子縁組は法的に成立すれば終わるのではなく、一生のプロセスであると考え、養親家庭同士の交流を大切にし、毎年何度かの親睦会を設けている。

このように、日本でもオープンアダプションタイプのひとつであるセミオープンアダプションがすでになされていることから、筆者は、これからの日本の養子縁組サービスが発展するにあたって、子どもと養親だけでなく、産みの親のニーズをも、より考慮することが一つのキーポイントになるのではないかと考える。

2．組織相関理論（Organizational-Relational Theory）

複雑な養子縁組プロセスは、【図1】のように、54のブロックから成り立つ立方体に表すことができる（Demick & Wapner 1988）。養子縁組の立方体の一つの次元は、縁組の当事者―子ども、養親、産みの親―からなり、二つめの次元は、養子縁組成立前、養子縁組成立中、養子縁組成立後と、時間的に分かれている。もう一つの次元は6つに分かれている。その6つは当事者の側面とその人の環境の面からなり、おのおのに3種類ずつのブロックがある（1．物理・生物的、2．自己内面、3．社会文化的な当事者の側面、4．物理的、5．対人関係、6．社会文化的なその人の環境の面）。このように、養子縁組を理解するには、全部で54変数と、それぞれの変数間の相互作用をみなければならない。

この理論に大きな影響を及ぼした自我関係理論（self-in-relation theory）では、人と人との関係を維持することを重要視する（Miller 1976）。養子、養親、産みの親が、それぞれのニーズと情況を認識し、またそれに敏感に反応してゆく自己意識を保持するのが正当であるとされる。感情移入（共感）によって、養子縁組三者は、相互関係にあるストレス、苦痛、また複雑さに耐えることが出来る、とSilvermanとDemick（1994）は主張する。

今回の調査では、組織相関理論に加え、血縁重視社会の中の養親子をみるために、次にあげるKrikのShared Fate理論とAdoptive Kinship理論も応用した。

3．血縁重視社会の中での養親子の絆

Kirkは、養親子の関係を「特別な血縁関係（adoptive kinship）」と呼び、養親子は「運命を分かち合う（shared fate）」と説いている（1964, 1981）。彼の理論では、従来、人の社会は血縁関係を重視するので、養親子の、初めから血でつながっていない関係には、どうしてもハンディキャップがあると指摘する。そのハンディキャップに否定的に対処すると、血のつながっている親子関係と養親子関係は同じものではないという事実から逃避してしまう。一方、肯定的に対処し、養親子関係と、血でつながった親子の関係の相違を容認していくこともできる。そうした上で、養親子には強い絆ができる。その絆作り過程で重要